小学校　国語

1　教育課程実施上のポイント

（1）目標

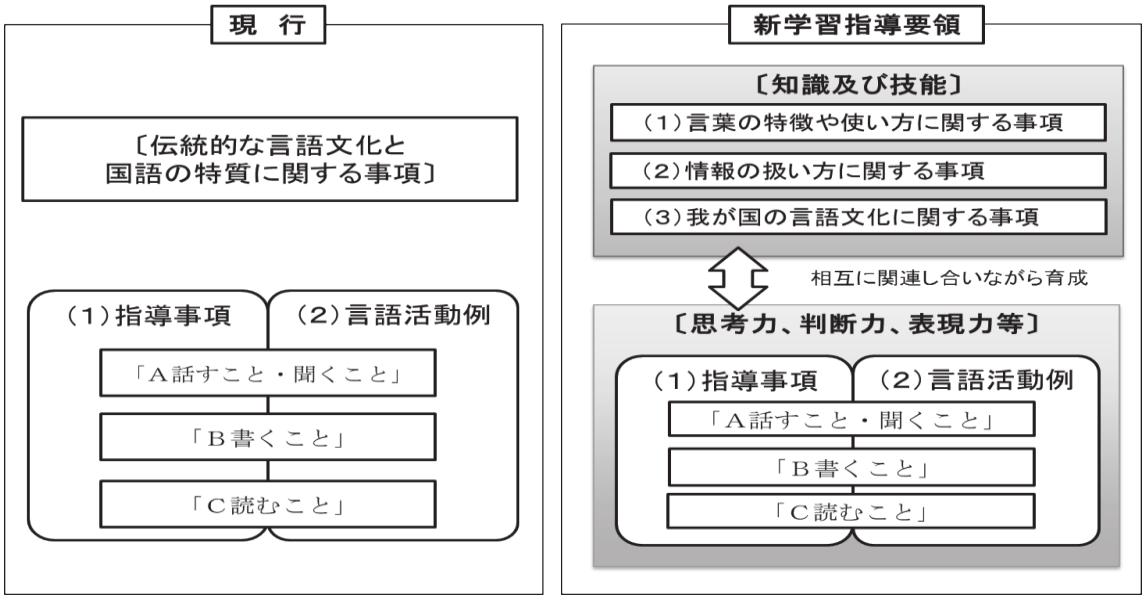
言葉による見方･考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質･能力を次のとおり育成することを目指す。
(1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
(2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

国語科の目標は、育成を目指す資質･能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定するとともに、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している。また、このような資質･能力を育成するためには、児童が「言葉による見方･考え方」を働かせることが必要であることを示している。

（2）実施上のポイント

①改訂のポイント

◇三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ、従前、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の３領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕に構成し直している。



◇語彙は、全ての教科等における資質･能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。このため、語彙を豊かにする指導の改善･充実が図られている。

◇情報の扱い方に関する「知識及び技能」は、国語科において育成すべき重要な資質・能力の一つであるため、「情報の扱い方に関する事項」を新設し、「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理して示している。

②主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業改善のポイント

○国語科では、「主体的･対話的で深い学び」の視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると言える。

（中教審答申 P131、132）

主体的な学び	子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。
対話的な学び	子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。
深い学び	「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要である。特にそのための語彙を豊かにすることなどが重要である。

③見方・考え方について

◇言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、言葉による見方・考え方を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。

（３）評価について

①目標と観点の趣旨との対応関係

◇第１学年及び第２学年の目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。	順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

◇第１学年及び第２学年の評価の観点及びその趣旨

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもっている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えをもったりしながら、言葉がもつよさを感じようとしているとともに、楽しんで読書をし、言葉をよりよく使おうとしている。

②「評価規準」を作成する際の手順

手順１　「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係を確認する。

「内容のまとまり」

〔知識及び技能〕	〔思考力、判断力、表現力等〕
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	A話すこと・聞くこと
(2) 情報の扱い方に関する事項	B書くこと
(3) 我が国の言語文化に関する事項	C読むこと

「評価の観点」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

つまり、〔知識及び技能〕は「知識・技能」、〔思考力、判断力、表現力等〕は「思考・判断・表現」と対応している。

手順２　【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する。

【観点ごとのポイント】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を**「～している」**として、「知識・技能」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。	○基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項について、その文末を**「～している」**として、「思考・判断・表現」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。 ○評価規準の冒頭には、当該単元（や題材）で指導する一領域を「（領域名を入れる）において、」と明記する。	○①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価できる評価規準を作成する。文末は**「～しようとしている」**とする。「学年別の評価の観点の趣旨」においては、主として、①に関しては「言葉を通じて積極的に人と関わったり」、②に関しては「学習の見通しをもって思いや考えをもったりしながら（学習の見通しをもって思いや考えを広げたりしながら）」が対応する。①、②を踏まえ、当該単元（や題材）で育成する資質・能力と言語活動に応じて文言を作成する。

※国語科においては、指導事項に示された資質・能力を確実に育成するため、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」が単元（や題材）の評価規準となる。

児童の学習の状況を適切に評価するために、実際の学習活動を踏まえて「Ｂと判断する状況の例」、「Ｃの状況への手立ての例」を評価規準に沿って想定することが重要です。

２　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導展開例

（１）単元名

「単元名」は、どのような資質・能力を育成するために、どのような言語活動を行うのかが児童にわかるように工夫する。

世代による言葉の違いについて意見文を書こう（第６学年）Ｂ書くこと

（２）単元の目標

(1)～(3)については、基本的に指導事項の文末を「～できる。」として示す。

(1) 世代による言葉の違いに気付くことができる。〔知識及び技能〕(3)ウ

(2) 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(1)イ

(3) 事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(1)ウ

(4) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

(4)については、いずれの単元においても当該学年の目標を示す。

（３）本単元で取り上げる言語活動

世代による言葉の違いについて、書き表し方を工夫して意見文を書く。

（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ（2）ア）

（４）単元の評価規準

前項の【観点ごとのポイント】を参照

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①世代による言葉の違いに気付いている。((3)ウ)	①「書くこと」において、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている。（Ｂ(1)イ） ②「書くこと」において、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。（Ｂ(1)ウ）	①粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって意見文を書こうとしている。

該当する指導事項を示すことで、学習指導要領の指導事項との関連を明確にする。

（５）指導と評価の計画（全９時間）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	○これまでの国語科の学習の中で古文に触れた経験を想起し、古文の言葉が現代の言葉と一部異なっていたことを振り返る。 ○現代であっても、保護者や地域の大人などの上の世代との会話において戸惑いや難しさを覚えた経験はないかということについて交流する。 ○戸惑いや難しさの原因が何であるのかを調べるとともに、調べて分かったことを基に意見文を書き、それらを文集にまとめるという学習の見通しをもつ。	・「枕草子」や「平家物語」の文章、「狂言」の台詞などを思い出させ、古文の中で用いられていた言葉と現代の言葉の違いに気付くようにする。 ・「話がどうも通じない」、「意味が分からない」、「馴染みのない言葉が出てくる」、「難しい」など、上の世代が発する言葉に漠然と感じた戸惑いや上の世代との会話の難しさに目を向けるように助言する。 ・完成した文章の読み手は学級の友達とし、文章は文集の形にまとめて学級内で共有するという見通しがもてるようにする。	【10の視点】 ①魅力的な課題・教材の提示 現代においても世代によって用いられる言葉が違うことに疑問をもち、その原因を調べて共有するという学びの必然性をもたせることで、単元全体の見通しを持つことができます。
2・3・4・5	○上の世代との会話において感じる戸惑いや難しさの原因が何であるのかを予想する。 ○戸惑いや難しさの原因を理解する手がかりとなる情報を資料から収集し、「調べたこと（事実）」としてノートに整理する。また、整理した情報から「分かったこと」もノートに書く。 ○ノートにまとめたことを友達と説明し合い、相互に質問したり気	・資料として「国語に関する世論調査」（文化庁）を紹介し、活用を勧める。 ・収集した情報は、出典を記録しておくように指導する。 ・収集した情報を使って戸惑いや難しさの原因を説明できるか、情報と「分	［知識・技能①］ ノート ・世代によって使用する言葉に違いがあることに気付いているかの確認。

	付いたりしたことを伝えたりして、自分の考えを整理する。 ○考えたことを読み手に伝えるために、文章全体の構成をどのようにするかを考え、文章構成表に整理する。 ○文章構成表を示しながら文章の大まかな流れを友達に説明し、筋道の通った文章になるかどうかを話し合う。	かったこと」が対応しているか、「分かったこと」が明確かという点を友達と確認するように指導する。必要があれば修正を求める。 ・「始め」、「中」、「終わり」の各部分に書く内容の大体と配置を考えるように促す。 ・読み手の関心を引くために、「始め」において問いかけたり、自分の経験を示したりする工夫を盛り込むようにする。 ・頭括型、尾括型、双括型の文章モデルを示す。 ・必要に応じて文章構成の修正を指導する。	【10の視点】 ④思考の整理 修正の跡を残すことで、自分がどのように推敲したのかを視覚化することができ、思考を整理しやすくなります。 ［思考・判断・表現①］ 文章構成表 ・筋道の通った文章構成になっているかの確認。 「単元の評価規準」について、評価する場面と評価方法、及び「Bと判断する状況」の例を示す。
6・7・8・9	○ノートに整理したことと文章構成表に基づいて下書きをする。 ○友達と下書きを読み合う。 ○下書きを修正し、それを基に清書する。 ○清書した意見文を友達と読み合う。 ○学習全体を振り返る。	・下書きを書く際は、客観的な事象による裏付けと合わせて自分が考えたことを示すという点に留意して、書き表し方を工夫できるよう助言する。 ・書き表し方について友達と助言し合うよう促す。 ・完成後は友達の考えや書き表し方のよさを伝え合い、自分の文章のよいところに気付けるようにする。 ・自分の考えたことを伝えるために、どのように書き表し方を工夫したのかを振り返らせる。	［思考・判断・表現②］ 意見文 ・考えを伝えるために書き表し方を工夫しているかの確認。 ［主体的に学習に取り組む態度①］ 振り返りの記述 ・粘り強く試行錯誤しながら書き表し方を工夫しているかの確認。
	【10の視点】⑧学習を振り返る活動の設定 単元の学びを振り返ることで、意見文の完成だけが目的ではなく、それによって、「何が分かり何ができるようになったのか」を児童が自覚することができます。		

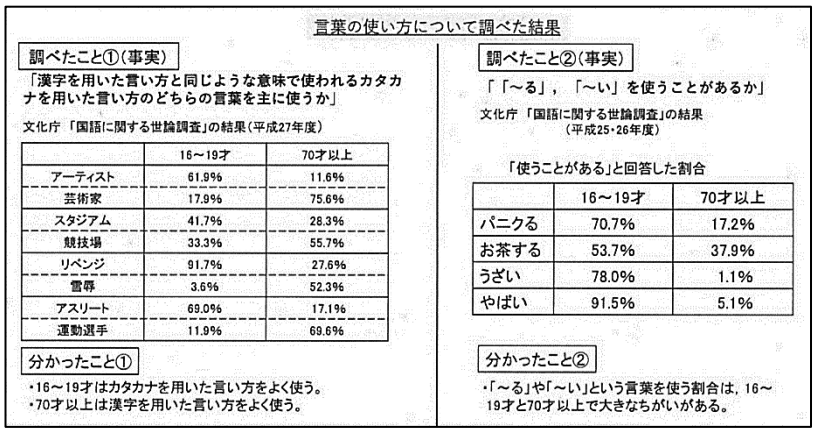
（６）観点別学習状況の評価の進め方

○「知識・技能」の評価（第２時・ノートの記述）

【知識・技能①】は、世代によって使用する言葉に違いがあるということに気付いているかどうかをノートの記述によって評価する。

ここでは、特に上の世代との会話において、児童が日頃感じている戸惑いや難しさの原因を予想するとともに、「国語に関する世論調査」を活用して原因を理解する手がかりとなる情報を調べるように指導する。その際、使用している言葉が世代によって一部異なっていることを示す情報を発見し、そこから分かったことをノートに記述している児童を「おおむね満足できる」状況（B）とする。例えば、**図１**に示す児童１は、世代ごとの傾向に関する情報を資料から収集し、ノートに整理している。そして、高齢者が漢字を用いた表現をよく使う傾向にあることや「パニクる」、「うざい」などの言葉を使う割合が若い世代と高齢者で異なるということを記述している。このような記述から、「おおむね満足できる」状況（B）と評価する。

一方、世代による言葉の違いに気付くことができていない児童は、「努力を要する」状況（C）とする。例えば、若い世代がよく使う言葉を数点調べただけで、世代間の違いを見出すまでには至っていないような児童である。そのような児童に対しては、教師が「それぞれの世代がよく使う言



言葉の使い方について調べた結果

調べたこと①（事実）

「漢字を用いた言い方と同じような意味で使われるカタカナを用いた言い方のどちらの言葉を主に使うか」

文化庁「国語に関する世論調査」の結果（平成27年度）

	16～19才	70才以上
アーティスト	61.9%	11.6%
芸術家	17.9%	75.6%
スタジアム	41.7%	28.3%
競技場	33.3%	55.7%
リベンジ	91.7%	27.6%
雪辱	3.6%	52.3%
アスリート	69.0%	17.1%
運動選手	11.9%	69.6%

分かったこと①

・16～19才はカタカナを用いた言い方をよく使う。
・70才以上は漢字を用いた言い方をよく使う。

調べたこと②（事実）

「「～る」，「～い」を使うことがあるか」

文化庁「国語に関する世論調査」の結果（平成25・26年度）

「使うことがある」と回答した割合

	16～19才	70才以上
パニクる	70.7%	17.2%
お茶する	53.7%	37.9%
うざい	78.0%	1.1%
やばい	91.5%	5.1%

分かったこと②

・「～る」や「～い」という言葉を使う割合は，16～19才と70才以上で大きなちがいがある。

図１：児童１のノート

葉について、他の世代ではどれくらい使っているか。」などと問いかけることによって、世代による言葉の違いに気付くことができるようにする。

なお、世代による言葉の違いがあることに気付くだけでなく、世代による言葉の違いは、言葉によって程度が異なるということにも気付いている児童は、「十分満足できる」状況(A)とする。

○「思考・判断・表現」の評価（第６・７・８時・文章構成表）

【思考・判断・表現②】については、自分の考えが伝わるように、書き表し方の工夫がされているかどうかを評価する。

本単元においては、自分の考えが伝わるようにするために、「事実」を客観的に示すこと、「事実」と「感想・意見」を関連させて提示すること、文末表現などによって「事実」と「感想・意見」とを明確に区別することが重要であることを指導する。また、「感想・意見」の客観的な裏付けとなるように、「事実」の出典を示したり、具体的な数値を記述したりする必要があることも指導する。そこで、信頼できる資料から得られた情報が、割合などの数値を伴って示され、それに基づいて分かったことや考えたことが書かれている場合は、「おおむね満足できる」状況（B）とする。

一方、「事実」と「感想・意見」との関係が不明瞭であったり、「感想・意見」の裏付けとなる「事実」が不十分であったり、文末表現が不適切であったりした児童は、「努力を要する」状況（C）とする。そのような児童には、資料から収集した情報（事実）から分かったことや考えたことを教師が例示したり、適切な文末表現について児童に問いかけて考えさせたりして修正に繋がるようにする。

なお、調べた「事実」を羅列するだけでなく、それらについて分かったことをまとめる文を書き、接続する語句を用いて、自分の意見について書いた文と適切につなげるなど、自分の考えがより明確に伝わるように書いている児童を「十分満足できる」状況（A）とする。

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価（第６・７・８時・意見文及び振り返りの記述）

【主体的に学習に取り組む態度①】は、自身の書き表し方の状態を理解し、それをさらに改善しようとしているかどうかという点を評価する。

本単元においては、「事実と感想、意見とを区別して書く」という書き表し方の工夫について学習している。これを受けて、記述の際の学習の振り返りとして、「事実と感想、意見とを区別して書く」ために「どのようなことに気を付けたか」、「どのような工夫をしたか」などを想起させ、ノートに書かせることにする。同時に、友達や教師から受けた指摘や助言、自ら気が付いたことを踏まえて、いつどのような修正を行っていくか、改善の内容や見通しについても振り返りの中に記述していくよう指導する。そこで、自身の書き表し方の工夫について振り返っているとともに、友達や教師と交流した際に得た指摘や助言を踏まえて書き表し方をさらに良いものにしようと粘り強く試行錯誤する様子が見られる児童は、「おおむね満足できる」状況（B）とする。例えば、**図２**に示したように、児童２は第６時の学習を振り返って「事実を示すために世論調査の情報を用いたこと」を想起するとともに、「『事実と分かったことが混同していて分かりにくい』という指摘をＡさんから受けたこと」や「Ａさんの指摘を受けて次時に修正する意向であること」についても記述している。

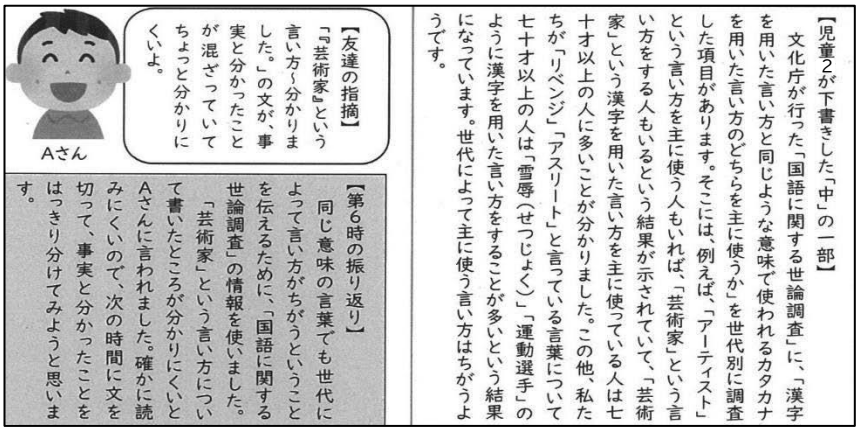


図２：第６時における児童２の意見文の一部と振り返りの記述

なお、結果的に自分の下書きを修正しなかった児童であっても、友達からの意見やアドバイスについての修正の可能性を検討するなど、粘り強く試行錯誤する様子を確認することができる場合には「おおむね満足できる状況」（B）と評価する。

また、自身の下書きを見直す中で、自ら修正点に気付き、それを進んで修正するとともに、友達や教師に自身の修正状況などを説明して積極的に助言を求めたり、教科書や学校図書館の科学的読み物に掲載されている意見文と見比べたりしながら書き直しの試行錯誤を行っているということが、振り返りの記述や下書きの変容から確認できる児童は「十分満足できる」状況（A）にあるとする。

中学校　国語

1　教育課程実施上のポイント

（1）目標

言葉による見方･考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質･能力を次の通り育成することを目指す。
(1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
(2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
(3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

国語科の目標は、育成を目指す資質･能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定するとともに、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している。また、このような資質･能力を育成するためには、生徒が「言葉による見方･考え方」を働かせることが必要であることを示している。

(1) は「知識及び技能」に関する目標を示したものである。社会生活における様々な場面で、主体的に活用できる、生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となる。

(2) は「思考力、判断力、表現力等」に関する目標を示したものである。未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」として育成することが重要となる。

(3) は「学びに向かう力、人間性等」に関する目標を示したものである。内容については、この教科の目標及び学年の目標においてまとめて示すこととしている。

言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、「言語活動を通して」、資質･能力を育成することを目指すとしています。引き続き、言語活動の質の向上に向けて取り組んでいくことが大切です。

（2）実施上のポイント

①改訂のポイント

◇三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ、従前、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の３領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕に構成し直している。

◇語彙は、全ての教科等における資質･能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素であるため、語彙を豊かにする指導の改善･充実を図っている。

◇情報の扱い方に関する「知識及び技能」は、国語科において育成すべき重要な資質･能力の一つであるため、「情報の扱い方に関する事項」を新設し、指導の改善･充実を図っている。

◇ただ活動するだけの学習にならないように、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けている。また、全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けている。

②主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業改善のポイント

○国語科では、「主体的･対話的で深い学び」の視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると言える。

主体的な学び	子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。
対話的な学び	子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。
深い学び	「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要である。

③見方・考え方について

◇言葉による見方･考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。この「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりする」とは、言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味することを示したものと言える。

授業改善を進めるに当たっては、指導事項に示す資質・能力を育成するため、これまでも授業実践の中で取り組まれてきたように、生徒が言葉に着目し、言葉に対して自覚的になるよう、学習指導の創意工夫を図ることが期待されます。

④移行措置について

◇令和２年度の第１学年、第２学年で学習する漢字に、以下を追加して指導する。

【都道府県名に用いる漢字の読みと書き】　（２０字）
茨、媛、岡、潟、岐、熊、香、佐、埼、崎、滋、鹿、縄、井、沖、栃、奈、梨、阪、阜

◇令和２年度の第１学年に「共通語と方言の果たす役割について理解すること」を加えて指導する。

（３）評価について

①評価の観点及びその趣旨

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。	「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを深めたりしながら、言葉がもつ価値を認識しようとしているとともに、言語感覚を豊かにし、言葉を適切に使おうとしている。

②「評価規準」を作成する際の手順

１.「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係を確認する。

「内容のまとまり」

〔知識及び技能〕	〔思考力、判断力、表現力等〕
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 (2) 情報の扱い方に関する事項 (3) 我が国の言語文化に関する事項	A話すこと・聞くこと B書くこと C読むこと

「評価の観点」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

つまり、〔知識及び技能〕は「知識・技能」、〔思考力、判断力、表現力等〕は「思考・判断・表現」と対応している。

２.【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する。

【観点ごとのポイント】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を**「～している」**として、「知識・技能」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。	○基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項について、その文末を**「～している」**として、「思考・判断・表現」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。 ○評価規準の冒頭には、当該単元（や題材）で指導する一領域を「（領域名を入れる）において、」と明記する。	○①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価できる評価規準を作成する。文末は**「～しようとしている」**とする。「学年別の評価の観点の趣旨」においては、主として、①に関しては「言葉を通じて積極的に人と関わったり」、②に関しては「学習の見通しをもって思いや考えを確かなものにしながら（学習の見通しをもって思いや考えを広げたり深めたりしながら）」が対応する。①、②を踏まえ、当該単元（や題材）で育成する資質・能力と言語活動に応じて文言を作成する。

※国語科においては、指導事項に示された資質・能力を確実に育成するため、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」が単元（や題材）の評価規準となる。

２　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導展開例

（１）単元名

「単元名」は、どのような資質・能力を育成するために、どのような言語活動を行うのかが生徒にわかるように工夫する。

投書を書こう　～多様な読み手を想定して文章全体を整える～（第３学年　Ｂ書くこと）

（２）単元の目標

(1)(2)については、基本的に指導事項の文末を「～できる。」として示す。
(3)については、いずれの単元においても学年の目標（全学年共通）を示す。

(1)具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(2)ア
(2)目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えることができる。〔思考力，判断力，表現力等〕Ｂ(1)エ
(3)言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

（３）本単元における言語活動

関心のある事柄について、投書を書く。（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ(2)ア）

（４）単元の評価規準

前項の【観点ごとのポイント】を参照

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めている。((2)ア)	①「書くこと」において、目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えている。(Ｂ(1)エ)	①進んで文章全体を整え、今までの学習を生かして自分の考えを投書に書こうとしている。

該当する指導事項を示すことで、学習指導要領の指導事項との関連を明確にする。

（５）単元の流れ

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	○学習のねらいや進め方をつかみ、学習の見通しをもつ。 ○関心のある事柄から新聞の投書で伝えたい題材を決める。 ○伝えたい自分の意見と根拠、根拠に関連する具体的な出来事や事実をワークシートに書き、整理する。	・実際の投書をいくつか示し、学習の見通しをもたせる。 ・実際の投書を参考にさせ、伝えたい内容を考えさせる。 ・既習の「情報と情報との関係」について想起させ、意見と根拠、根拠に関連する具体的な出来事や事実を整理させる。	【10の視点】 ①魅力的な課題・教材の提示 実際の投書を示すことで生徒の興味を引き出し、単元全体の見通しを持つことができます。 ［知識・技能］① ワークシート ・根拠に関連する具体的な出来事や事実
2	○これまでの「書くこと」の学習を想起し、投書の下書きをワープロソフトで入力する。 ○グループで互いの下書きを読み合い、分かりにくい部分等について確認し合う。	・この段階では、目的や意図に応じた表現にこだわらせずに、下書きを完成させることを目標とする。 ・学校のICT環境に応じて、タブレット端末を交換させたり、座席を移動させたりするなどして、他の生徒が書いた下書きを読ませ、読みにくいと感じたり分かりにくいと思ったりした部分に線を引いてコメントを入力させる。	本時は、Ｂ（1）ウに基づいて学習状況を捉え指導を行うが、単元の目標としていないことから、本単元の評価には含めない。 【10の視点】 ⑥学び合う活動の充実 実際の話合いではなく、ＩＣＴによる文字を媒体として対話することで、話すのが苦手な生徒が参加したり、考える時間を確保したりすることができます。
3	○教師が用意した投書を読み、投書にふさわしい表現について考える。 ○投書にふさわしい表現について考えたことを伝え合う。 ○読み手の立場に立って自分の下書きを読んで、投書を書くという目的に応じた表現になっているかを確かめ、気が付いたこ	・第3学年の「書くこと」で学習してきた文章の構成や表現の仕方などに着目させ、投書を書く目的や意図に応じた表現とはどのようなものかを考えさせる。 ・2～3人で共有させた後、学級全体で共有させる。 ・投書にふさわしい文章の構成や表現の仕方について共有したことを踏	［主体的に学習に取り組む態度］① 下書き原稿 ・多様な読み手に自分の考えが分かりやすく伝わる表現の検討

	とをワープロソフトのコメント機能を用いて入力する。	まえ、前時の線の部分を中心に、自分の下書きの表現を確かめさせる。 ・確かめて気が付いたことを基に、文章全体をどのように整えたいかを「～が分からない（伝わってこない）。だから～したい（する）。」等のように入力させる。	【10の視点】 ④思考の整理 修正の跡を残すことで、自分がどのように推敲したのかを視覚化することができ、思考を整理しやすくなります。
4	○前時に考えたことを基に、ワープロソフトの校閲機能を用いて、自分の下書きを推敲する。 ○推敲した文章を教師に提出する。希望者は清書し終わったデータを投稿する。 ○単元の学習を振り返る。 【10の視点】 ⑧学習を振り返る活動の設定 単元の学びを振り返ることで、投書の完成だけが目的ではなく、それによって、「何が分かり何ができるようになったのか」を生徒が自覚することができます。	・校閲機能を用いて、修正の跡を残しながら書かせる。 ・コメントや校閲機能による修正の跡が残っているデータを印刷して教師に提出させる。 ・提出後、希望者は，修正の跡を消して清書したデータを、新聞社のウェブサイト等から投稿してもよいこととする。 ・目的や意図に応じた表現に整えるために、どのように試行錯誤したのかを振り返らせ、本単元で学んだことを、今後の学習でどのように生かしたいかを考えさせる。	［思考・判断・表現］ ① 推敲した文章 ・多様な読み手に自分の考えが分かりやすく伝わる表現 「単元の評価規準」について、評価する場面と評価方法、及び「Bと判断する状況」の例を示す。

単元の大きな流れの中で、学習課題の解決に向けて、既有知識を活用したり、友達の意見を聞いて自分の考えを再整理したり、新たな発見をしたりするなど、生徒が言葉に着目し、試行錯誤しながら主体的に思考、判断、表現していく過程が、国語科が目指す資質・能力を着実に育成します。

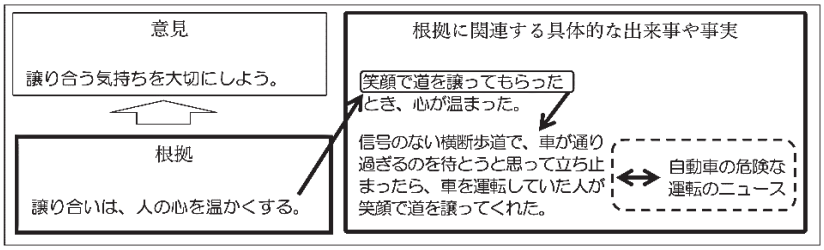
（６）観点別学習状況の評価の進め方

○［知識・技能］の評価（第１時・ワークシート）

「おおむね満足できる」状況（B）の例を、「根拠に関連する具体的な出来事や事実」をキーワードにして具体的に想定する。例えば、**【生徒Ｐが記入したワークシートの例】**では、根拠の「譲り合いは、人の心を温かくする。」に関連する具体的な出来事として「笑顔で道を譲ってもらったとき、心が温まった」体験とその時の具体的な状況を記入していることから、キーワードに該当すると判断できる。

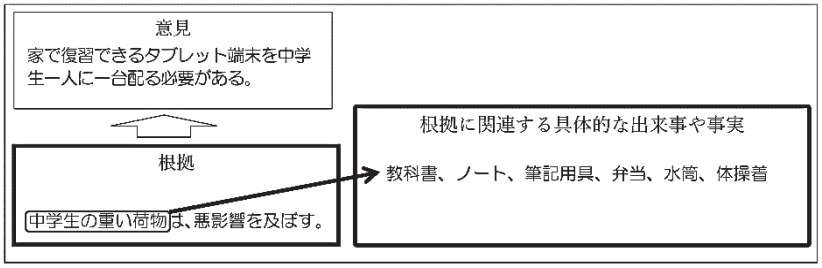
生徒Ｐに対して、「今、あなたが考えている事例は根拠に関連していてよく書けていますが、一事例だけではなく、他の事例も考えられませんか。」と助言したところ、［------］の部分のように、自分が体験した出来事とは対照的な出来事として「自動車の危険な運転のニュース」を付け加えた。このことにより、キーワードに加え、複数の具体的な出来事や事実を関連付けて説明していると判断し、「十分満足できる」状況（A）とする。

【生徒Ｐが記入したワークシートの例】



一方、**【生徒Ｒが記入したワークシートの例】**では、根拠として記述している「悪影響を及ぼす」という抽象的な内容に関連する具体的な出来事や事実が示されていない。そのため、キーワードには該当せず、生徒Ｒは「努力を要する」状況（C）にあると判断する。生徒Ｒに対しては、「重い荷物ではなく、その荷物による悪影響として、具体的にどのようなことがありますか。実際にあった出来事や事実を書きましょう。」と助言することも考えられる。このように、自分の意見の根拠について、具体化すべき箇所をつかめず、関連する具体的な出来事や事実を示して説明することが不十分な場合には、具体化すべき箇所を指摘するとともに、その内容と関連してどのような出来事や事実があるのかを想起させ、生徒が具体と抽象の関係

【生徒Ｒが記入したワークシートの例】



について理解を深められるようにする。

○［思考・判断・表現］の評価（第４時・ワープロソフトの記述）

「おおむね満足できる」状況（B）の例を、「多様な読み手に自分の考えが分かりやすく伝わる表現」をキーワードにして具体的に想定する。例えば、**【生徒Ｐが推敲した文章の例】**では、書き出しを①のように書き改めている。このことにより、読み手が「うれしいことというのは一体何だろうか。」と文章の内容に興味をもちながら読み進めることができるようになっている。そして、道を譲ってもらったエピソードの後に、それとは対照的な自動車の危険な運転の話題へと転換することで、自分の考えが読み手に分かりやすく伝わる文章の構成となっている。また、下線部②では、中国の古典の言葉を正確に引用することで、説得力を高めている。これらのことから、キーワードに該当すると判断できる。

【生徒Ｐが推敲した文章の例】

~~テレビで、自動車の危険な運転のニュースが連日のように流れている。それは、心のゆとりのなさによって起きてしまうのではないだろうか。~~

①先日、下校時にうれしいことがあった。いつも通る信号のない横断歩道に近づくと、車がこちらに向かって走ってきた。私は、車が通り過ぎるのを待とうと思い、立ち止まった。すると、その車はゆっくりと止まってくれたのだ。私が会釈をして渡ろうとすると、車を運転していた人は笑顔を返してくれた。

テレビで、自動車の危険な運転のニュースが連日のように流れている。それは、心のゆとりのなさによって起きてしまうのではないだろうか。「一生道を譲り続けたとしても、そのても合計は百歩にも満たない。」②ならないという中国の古典の言葉を学校の先生から教えてもらったことがある。③ちょっと道を譲ったとしても大きな損はないと思えば、心にゆとりが生まれるはずだ。

私は、笑顔で道を譲ってもらったとき、心が温まった。ちょっとした譲り合いが、私たちの心を温めてくれる。譲り合う気持ちを大切にしてみませんか。

コメント【P1】：いきなり自分の考えが書いてあるので、この考えに賛成しない人は、読むのをやめてしまうかもしれない。最初は自分が体験した出来事から書き始め、物語のように話を進めることで、分かりやすく自分の考えを伝えられるようにしたい。

コメント【P2】：誰の言葉？（山田）

コメント【P3】：誰から？（佐藤）

コメント【P4】：誰から教えてもらったのかが分からないので、学校の先生から教えてもらったと書く。
先生に確認して、正確に紹介することで説得力を高めたい。

なお、下線部③は、第４時で推敲する際に、新たに修正されたものである。この一文を加えるとともに、次の文から段落を変えたことにより、ニュースの話題と中国の古典の言葉との関連が明確になっている。このことから、キーワードに加え、多様な読み手に対して特に分かりやすく自分の考えが伝わる表現に整えていると判断し、「十分満足できる」状況（A）となる。

○［主体的に学習に取り組む態度］の評価（第３時・ワープロソフトのコメント機能の内容等）

本単元では、目的や意図に応じた表現になっているかを確かめて、文章全体を整える力を身に付けさせることに重点を置いているので、文章全体を俯瞰し、多様な読み手に対して自分の考えが分かりやすく伝わる表現に文章を整えようとする過程で、特に粘り強さを発揮させたいと考える。また、文章の構成や表現の仕方等について今まで学習したことを生かして自分の考えを投書に書く活動の中で、自らの学習の進め方を調整できるようにしたいと考える

そこで、「おおむね満足できる」状況（B）の例を、「多様な読み手に自分の考えが分かりやすく伝わる表現の検討」をキーワードにして具体的に想定する。次の**【生徒Ｐがコメントを書き込んだ下書きの例】**では、コメント【Ｐ１】で、投書の読み手は様々な立場にあったり多様な考えをもっていたりすることを想定し、書き出しでは自分の考えを示すのではなく、具体的な体験を述べることで自分の考えが分かりやすく伝わる表現にしようとしている。また、コメント【Ｐ２】、【Ｐ３】は他の生徒からの指摘である。それらを踏まえて、コメント【Ｐ４】では、資料を適切に引用することで読み手に対する説得力を高めようとしている。これらのことから、キーワードに該当すると判断できる。

【生徒Ｐがコメントを書き込んだ下書きの例】

テレビで、自動車の危険な運転のニュースが連日のように流れている。それは、心のゆとりのなさによって起きてしまうのではないだろうか。

先日、いつも通る信号のない横断歩道に近づくと、車がこちらに向かって走ってきた。私は、車が通り過ぎるのを待とうと思い、立ち止まった。すると、その車はゆっくりと止まってくれたのだ。私が会釈をして渡ろうとすると、車を運転していた人は笑顔を返してくれた。

一生道を譲り続けても合計は百歩にもならないという言葉を教えてもらったことがある。私は、笑顔で道を譲ってもらったとき、心が温まった。ちょっとした譲り合いが、私たちの心を温めてくれる。譲り合う気持ちを大切にしてみませんか。

コメント【P1】：いきなり自分の考えが書いてあるので、この考えに賛成しない人は、読むのをやめてしまうかもしれない。最初は自分が経験した出来事から書き始め、物語のように話を進めることで、分かりやすく自分の考えを伝えられるようにしたい。

コメント【P2】：誰の言葉？（山田）

コメント【P3】：誰から？（佐藤）

コメント【P4】：誰から教えてもらったのかが分からないので、学校の先生から教えてもらったと書く。
先生に確認して、正確に紹介することで説得力を高めたい。

生徒の学習の状況を適切に評価するために、実際の学習活動を踏まえて「Ｂと判断する状況の例」、「Ｃの状況への手立ての例」を評価規準に沿って想定することが重要です。